

# ピンチを チャンスに

中山間地域の小規模校である佐伯高校では、来年度から女子硬式野球部を立ち上げ、特色ある学校づくりを進めていく。定員割れが続く中で、ピンチをチャンスに変えようとする、佐伯高校の西尾明校長先生にお話を伺った。



特色ある高校を目指し、女子硬式野球部の創設に取り組む佐伯高校。広域からの入学者を確保するため、今後積極的にPRに努める。



広島県立佐伯高等学校  
にしお・あきら  
西尾 明校長

広島県立佐伯高等学校（津田・生徒数83人）は、吉和地域の住民にとって唯一の自宅から通える高校でもあり、その存続は地域住民に直結する問題である。4年連続で定員割れが続く同校では、今年度その活性化策を考える協議会を立ち上げた。委員7人で構成する協議会では、教育課程の見直しなど生徒確保に向けた具体策について現在までに3回会合を行っている。

佐伯の自然や歴史を生かした教育課程の見直しを図り、少人数ならではの良さを生かしながら、より充実した教育の実践に取り組む。

その目玉となるのが、中国地方で唯一となる女子硬式野球部の創設だ。市外からも広く新入生を募り、来年度からの活動を目指す。中山間地域の小規模校で特色ある高校として生徒数を増やすのが狙い。

全国で女子硬式野球部がある高校は19校。その中で公立校は高知県立室戸高校のみ。野球に励む女子中学生は、県外の私立高校にいくか他の競技に方向転換するかを高校選択時に迫られるのが現状だという。

佐伯高校は、現在アーチェリーのジュニア日本代表を2人擁し、ロンドンオリンピックで活躍した石津優選手を輩出したアーチェリーの名門校。

「アーチェリーのほかにもう一つ軸となるものと、地域の後押しもあって取り組んでいきます。スポーツの裾野を広げてい

くのは公立高校の使命でもありません」と、西尾明校長は語る。

施設や用具は既存のものを使用し、外部からコーチを呼び込む。「野球をやりたいという女子生徒の望みを叶えたい。そして、伸び伸びと活躍できる環境を提供し、目的意識の高い生徒を集めたいと思っています」。

また、佐北駅伝やトライアスロンなどのボランティアをはじめ、地域へ積極的に関わり、地域に開かれた高校としての取り組みにも力を入れている。11月2日(日)・3日(祝)で行われる文化祭は、文化協会佐伯支部と合同で「佐伯地域文化祭」として、さいき文化センターで開催される。「数年後の姿を意識して取り組んでいます」と、西尾校長は強調する。

「生徒の顔と名前が覚えられないのが少人数校の特徴です。これからは佐伯高校というイメージをブランド化していくことが必要だと考えています。そのためにも、教員自身も変わらなければなりません」。

昭和21年、広島県立津田農学校としてスタートを切った佐伯高校。開校から68年が経ち、定員割れというピンチを迎えた現在、特色ある学校づくりでチャンスに変える。

## いつか、必ず帰る

地元が好き。  
私たちは高校を卒業すれば、いったんは外に出てしまいかもしれないけれど、いつか、必ず地元に戻ります



写真は、佐伯高校生徒会の皆さん。右から、門田葵（かどた・あおい）さん、松野美那（まつの・みな）さん、河田悠希（かわた・ゆうき）さん、川崎翔太（かわさき・しょうた）さん、琴野将聖（ことの・ゆきとし）さん、平齋菜樹（たいら・かなき）さん。

佐伯高校生徒会の皆さんに、高校や佐伯地域をどう思っているかを聞いてみた。

「先生との距離が近く、親身になって教えてもらえる」「人数が少ないからこそできる部分が多い」「やりたい部活が実現できる」などが挙げられた。

また、「地域の人と関わる人が多い」「歩いていると声を掛けてもらえる」「文化祭の練習も一緒に行っている距離が近い」との答えも返ってきた。

「佐伯は不便だと思っていましたが、その不便さも佐伯の魅力の一つ。山だったり、川だったり、この自然を残したまま、誰にとっても『ふるさと』と呼ばれるようになってもらえればと思っています。自分が生まれ育ったのはここだと胸を張って言えます」。

生徒の一人は、そう話してくれた。

高校を卒業すれば、それぞれの道を歩んでいく。佐伯地域外から通う生徒も多く、それぞれが自分の地元を帰りたいと思いませんか？と尋ねたところ、全員が「はい」と大きな声で返してくれた。